（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属:（学部（研究科）・学年）　農学部・4 年

氏　　名: 岩永　響希

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンックト王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日　～　2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

私はこの研修に参加して大きく2つの事を学んだ。

1つ目は海外で働き、そして成功するために必要なことは、その国の文化や国民の考え方を前もって理解しておくということだ。訪問先の1つである味の素アユタヤ工場では日本人は2名のみであった。彼らはその他大勢の従業員を働かせ、商品を製造しなければならない。その際、彼らのことを理解し尊重することで、より良い職場環境の構築が図れ、仕事の効率化や優れた商品の開発、製造が可能になると考えられる。

2つ目は外国語を正しく読解できることはスキルの1つに過ぎず、重要なのは会話が可能であるかということである。これまで私は主に英語の学習をしてきた。しかし、私が行ってきたのは正しく読解する学習であり、他人と会話する能力は身につかなかった。会話をするために必要なことは、より多くの単語を知っておくことと傾聴し意志表示をはっきりと示すこと、そして会話をサポートできるジェスチャーをわかりやすく、そしてたくさん利用することだと考える。研修先で、問題解決型学習の一環として日本とタイの学生が意見交換し、考えをまとめた後スライドを用いて発表するという活動(PBL)があった。最初はお互いの意見に対して首を傾げる場面がみられた。しかし相手が理解できるよう表現を変えたり、ジェスチャーを加えたり、図に表したりと工夫を重ねた結果、お互いの考えにまとまりが生まれた。今後も外国語を学習する機会があると思うが、会話が可能になるという大きな目標のために、これらの3 つのことを意識して取り組もうと考えるようになった。

〔研修後の抱負〕

タイの研修に参加してタイの文化や歴史、タイ人の考え方を知ることが出来た。日本に留まりネットで得た情報とは大きく異なり、実体験が含まれている分、中身が濃く貴重な情報ばかりだった。私は将来海外で働きたいと考えている。そのために、今後なるべく多くの国に行き、そして多くの人々と会話し、人脈を広げ、各国の文化や歴史、国民の考え方をあらかじめ把握しておくべきだと考える。また、今回の研修では私が行っている研究とは多少異なる分野を扱っている研究も視察する機会があったので、今後も様々な研究分野に関して見聞を広めたいと考える。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修　　報　　告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属:（学部（研究科）・学年）農学部・3 年

氏　　名: 阿比留壮大

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日～2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回参加した「国際感覚を持つバイテク人材育成」の研修において、2つの事に大いに刺激をうけた。まず 1 つ目は私たちが今回の研修で大変お世話になったモンクット王工科大学の学生や教授からの刺激である。彼らは我々の研修中、嫌な顔ひとつせず、最後まで気にかけてくれた。また、学生の学問に対する熱意にも驚かされた。構内にある食堂では昼夜を問わず、グループで課題についてディスカッションをしていた。私は彼らの学問に対する真摯な態度を目の当たりにして、いつか日本人はタイ人に追い抜かれてしまうのではないかという危機感を覚えた。しかし、それと同時に自分も日本人として負けてはいられないと強く感じた。2 つ目はフィールドワークで見学した「味の素」の現地の人との接し方にとても感銘をうけた。例えば、うまみ調味料に含まれているMSG（グルタミン酸ナトリウム）に対するタイでのネガティブなイメージを払拭するためにMSGを正しく理解してもうための啓蒙活動が行われていた。また、出向する日本人社員と現地の人とのコミュニケーションを円滑化するためにレクレーションなどを共同で行なっていた。これらの取り組みをみて、海外で働くことの大変さや、自分たちの商品を正しく知ってもらいたいという熱意が伝わってきた。自分もこの姿勢を見習い、タイの方々と友好な関係を築きたいと思った。

〔研修後の抱負〕

今回の研修中、自らタイ人とコミュニケーションを取ろうとする積極的な姿勢が欠けていたことが一番の反省点だと思う。そこで、今後は語学の勉強、特にリスニング能力を高めることにより一層力を入れていきたい。また、何より、多少恥をかいてでも異文化で育った人間から自分にない知識や価値観を取り入れようとするハングリ―精神を養っていきたい。そして、今後ますますグローバル化が進んでいく社会に何か一つでも貢献できるような人材になりたいと強く思った。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属:（学部（研究科）・学年）農学部・2 年

氏　　名:青野　暖

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日　～　2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回の研究で 2 つのことを学んだ。

1 つ目は、自分の考えや意思を伝えるのに、ジェスチャーを多用すること、一つのことに対して様々な表現ができるようになっておくこと、そのための単語力をつけておくことが大切だということだ。実際の英語で会話をする中でうまく伝わらないことが多かったが、ジェスチャーや他に表現する単語があればそれを足掛かりに理解してくれることがあった。また、私は甲殻類のアレルギーがあり、今回の研修の食事で何度もアレルゲンが入っていないか確認した。事前にタイ語でその旨を書いたカードを用意してもらいそれに助けられてばかりだったが、それでも加えて英語で伝えることができれば食の安全は確保しやすかった。英語が使えるようになることは自分の身を守ることにつながるのだと実感した。

2 つ目は、どこかで自分が活動するにあたって重要なのはその土地の人々とのつながりを大切にすることだ。味の素では海外に派遣される際はその国の文化や気質を学ぶ研修があるという。味の素に限らず見学に行った工場には全自動の過程もあれば人の手が加わる過程もあり、人の手が加わる過程ではその工場の土地の人々がパートとして働いていることが多い。国内外どちらであっても、その活動はその土地と人々に支えられてできることであり、自ら歩み寄り理解していくこと、関わりを作ることが成功への一歩になることを学んだ。

〔研修後の抱負〕

英語で会話をしたり授業を受けたりする中で自分の英語力のなさを実感した。意思疎通の手段としての英語は伝わる楽しさがあり、それを忘れずに勉強していきたいと思う。今回の研修ではタイと比較することで日本のことをより知れた。国際的に活動するにあたり自分の国をどれだけ知っているかは重要だと思ったので、より日本について知っていきたい。レクチャーでも企業訪問でも学校の授業の内容が出てきた。それらの知識が手伝って理解できたことが多く、授業を大切にしてこれからの研究に役立てられるような基礎を確立していきたいと思う。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：農学部生物資源化学科・2 年
氏　　名: 瀬戸山　穂波

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日 ～ 2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修で、よく印象に残っているのは、タイにおけるポストハーベスト技術開発についてである。タイのような農作物産出国において、ポストハーベスト技術が重視されている理由として、気温が高い地域であることから、保存・運搬の段階で農作物の多くの品質低下を防ぐことがあげられるようだ。訪問先の大学の先生による授業の中で世界の食糧の無駄な消費に先進国での大量の廃棄と収穫後の腐敗があげられ、それらが多くを占めていることを学んだ。実際、訪問先の大学の研究室では、フルーツの長期保存に利用できる技術を研究開発しているところもあった。マイクロバブルを使った防腐剤の効果的な処理技術や、特殊な包装素材による果実の呼吸量の制御技術など実際に見たり触ったりできたのは、とても良い勉強になった。このようなポストハーベスト技術を発展させていくことは世界の食糧不足の解決につながると強く感じた。また、会社訪問では、ひとつに日本の食品会社である味の素を訪問した。日本人スタッフの方から、海外に日本の企業が進出するときのことについてたくさんの面白い話を聞くことができた。 海外の支店に派遣されるにあたって職員は、その国の文化や、そこに住む人の気質、考え方について学ぶ研修を受けるらしい。例えば、タイでは、日本に比べ家族を大切にする文化があったり、日本人のように繊細な心をもっていたりすることを学んだようだ。その土地ごとに従業員の人たちと良い関係を築き、成功していくための重要な要素であることを深く理解できた。自分が将来、国際的な人材として働く立場になった時には、ぜひ真似してみたいと思った。ほかにも、進出先を探すのにおいて、原料の調達のしやすさ、輸出のための交通の便などが重要であることも学んだ。

〔研修後の抱負〕

今回の研修では、食についての学習以外にも現地の学生とふれあい、タイの生活を知り、文化や歴史についても学ぶことができた。大きな壁だと身構えていたコミュニケーションもつたない英語でなんとか伝えることができ、言葉をこえて新しい友情を築き、感謝の気持ちを伝えることができとことはとてもうれしく、本当にいい経験になったと思う。これからも様々な国の文化や生活を理解し、または、英語以外の言語にも少し挑戦したいというのが今の私の抱負である。また、今回出会うことができたタイの学生のみなさんともこれからもよい関係を築いていきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）　農学部・2年

氏　　名:　四元　奈都子

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日　～　2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回、タイに行って講義を受けたことにより、英会話の重要さを学ぶとともにリーダー足りうる人材の育成には多くの知識を有するだけでなく、それをいかにわかりやすく伝えるか、また、話を聞く姿勢や相手の背景を知ることの大切さを改めて知った。実際に現地に行ったことにより、どういった研究が現地で役立っているのかを知ることが出来た。輸出や長期保存のための調味料や果物の保存法や、花の匂いがタイではあまり好かれていないため、においのあまりしない蘭が作られていたりすることを知ると同時に、実際にマーケットに行って、温度や屋台での実際の保存方法など、どういった課題があるのかを直に確認することが出来た。

〔研修後の抱負〕

あちらの学生と話しているとき、日本のことや鹿児島のことを聞かれても、上手に説明できない場面が多々あった。後日振り返って感じることは、英語の語彙力のなさと共に、日本のことを説明できるほど知らないということだった。よってこれからは英単語をたくさん覚え、鹿児島の魅力を発信できるようにするとともに、改めて日本に目を向けてみようと考えた。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）工学部・2年

氏　　名: 長友　琴愛

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ/バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日　～　2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

KMUTT で講義を受けたり、ラボツアーをしたりしたことで、タイでのフルーツや花卉などの保存方法や使用方法をより詳しく聞き、実際に目で見ることができた。例えば、パイナップルやリンゴを試薬そのものではなく、マイクロバブルで包み短時間処理することでより、それらを長期間の保存を可能にすることができるといった技術である。

さらに様々なマーケットを訪れたことでどのようにしてフルーツが人々の手に渡っていくのかということを肌で感じることができた。また、実際に自分で購入をするなどしてタイの人々の人柄を知り、タイの人々とコミュニケーションをとり伝えようとする力を身に付けた。

会社訪問では、AJINOMOTO、ラン農園、NFI、CPF、Chew Huad Co. ,LTD を訪れた。どの会社でも地元の人々が過ごしやすい環境や働ける環境づくりに励んでいることが分かった。AJINOMOTO では日本の会社ということもあり、タイで運営していくコツや、特に気を付けていることなどを教えていただいた。

PBL のディスカッションでは事前に準備していた資料を基に議論をしたのだが、想定外のことが次々起こり、ついていくことができなかった。自分の伝えたいことを明確にすることができなったということが心残りだった。

最後にタイのワット(寺)や日本人村などでタイの歴史や文化を学び、タイという国がどのようにして現在の形になっていったのか、また日本との関係も知ることができた。

〔研修後の抱負〕

この成果を通じて、これから学んだことをこの鹿児島や九州でどのようにして活かせるかということを常に考えたいと思った。また伝えようとする力を身に付けたことで、どのような状況でも積極的に発言をしていこうと思う。さらに他国やその地域の文化や生活の違いを知る、という努力をこれからも続けていき、その人々にあった、暮らしの提供について考えていきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）工学部・2年

氏　　名:山田菜々海

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日 ～ 2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回のタイでの研修を通して、タイの食文化や歴史、慣習にふれ、異文化に対する理解を深めることができた。タイでは温暖な気候によりフルーツやランなどの園芸植物の生産が盛んで、海外に多く輸出しているが、より品質の高い状態で安全に消費者のもとに届けるために様々な技術開発が行われていることが分かった。

また、タイで大手の食品関連企業をいくつか見学したが、どの企業にも共通していたのはその場で働く人々や消費者、地元の人々など人のことをなにより大事に考えていることだった。なかには寄付や奨学金制度など、地域貢献に深く関わっている企業もあり、リーダーとしてあるべき姿を学んだ。

私は流暢な英語を話せるわけではなかったが、簡単な単語とジェスチャーを用いることでタイの学生とコミュニケーションをとることができた。言語も大切だが、それ以上に伝えようとする気持ちが大切なのだということを身をもって体験した。

これまでは日本国内のことばかりに意識が向いていたが、今回の研修を通して海外で活躍する人々の姿を見て大きな刺激を受け、世界へと視野を広げることができた。

〔研修後の抱負〕

日常生活のコミュニケーションにおいては、あまり不自由はなかったが、PBL のような専門的な内容になると、自分の意見を相手に正確に伝えることが難しかった。そのため、ディスカッションをできるくらいの英語力と相手の意見を引き出せるような力を身に付けたい。また、グローバルな人材になるためには知識が必要となるので自分の専門分野はもちろんのこと、それ以外のことも積極的に学びたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

授業参加者
所属：（学部（研究科）・学年）農学部・1年
氏　　名：古瀬成美

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先（国・地域） 滞在地	タイ（バンコク）　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日 ～ 2017 年 2 月 26 日

〔研修の成果〕今回の研修を通して、研修前と比べると何事にも積極的になれたと実感しています。まず、研修初日は、今回ずっとお世話になった KMUTT を訪問し、KMUTT の生徒の方々に自己紹介を含んだプレゼンをしました。相手にしっかり伝えるためにも、聞き手の目を見ながら堂々とプレゼンしたかったのですが、緊張してしまいコメントを返してくれたのにプレゼンに精いっぱいで、質問に対する応答が十分にできませんでした。次の日から、KMUTT の先生方の講義やフィールドワークが増えました。フィールドワークではラン農園、AJINOMOTO（アユタヤ）、アユタヤの世界遺産、NFI,CPF,しょうゆ工場などを訪れました。工場見学の際、バイオサイエンスの専門的な話になることも多く、まだ勉強不足で理解できないこと、わからないことを知りたいという気持ちで積極的に質問するようになりました。また、私は今回一番年下でしたが、知識も豊富な先輩方とともに学ぶこと、積極的に質問する姿を真似することで、専門的な知識も少しずつわかるようになりました。そしてタイ語から英語に翻訳してくれた KMUTT の先生のおかげで、つたない英語ですが、安心して英語で質問することに挑戦することができました。このように周りの環境が整っていたおかげで英語に対して積極的になれました。フィールドワークの時だけでなく、それぞれ自由にマーケットなどで食事をするとき、隣に座ったタイ人の方から話しかけられることも多く、タイ語や英語を使ってコミュニケーションをとりました。
日本だとなかなか見ないことですが、私はこのようなタイの人々の気さくな人柄がとても好きになりました。また、研修ではたくさんの貴重な体験ができました。引率してくださった岡本先生、花城先生をはじめ、KMUTT の先生と学生の方々、この研修に携わったすべての人々と、自分の両親に対して、こんな有意義で貴重な体験をさせてくれたことにほんとに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

〔今後の課題〕今後の課題としては、まず日本で英語を話す機会を増やすことです。今回身につけた「伝えようとする気持ち」を忘れないためにも、英語を使って海外の方と話す機会は増やしていきたいと思います。以前からとっていたインテンシブイングリッシュを継続的にとり、英語の話す力だけでなく語彙力も足りないと強く感じたので、このモチベーションを維持したまま勉強に励みたいと思います。また今回の研修を通してさらに海外という場所が魅力的だなと思いました。タイだけでなく、ほかの国にも大学生の間に挑戦してみたいと思います。次はもっと積極的に英語を使ってコミュニケーションをとって意見を交換できることを目標に頑張りたいと思います。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）　農学部・1年

氏　名:　豊福　明莉

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成（KMUTT）・タイ研修
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク　モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2017 年 2 月 15 日　～　2017 年 2 月 26 日

〔研修を通じて得た成果〕

まず私は、タイにいくのは初めてで、不安だったのですが、この研修を通して出会ったたくさんの方々のおかげでタイの文化や歴史、生活、食事など多くのことを自らの肌で知ることができ、とても大きな財産になりました。特に、KMUTT での講義や PBL,研究室訪問が印象に残っています。講義では、花の輸出や果物について学び、研究室訪問では、ポストハーベストの研究や、果物の品質維持などの研究を見学して、日本と気候・環境が違うからこそできる研究にとても興味を持ちました。また、PBL では、現地の学生と話し合いながら進めていきましたが、どのように相手と折り合いをつけていくのか、どうすれば説得力のある伝え方ができるかということも試行錯誤しながら学び、知らなかった知識をたくさん蓄えることができると同時に、それらについてもっと知りたいと思うようになりました。

また、この 10 日間を通して、コミュニケーションというものを改めて考えさせられました。今までは、きちんとした発音と文章じゃないと、という思いが強く、なかなか自分から声をかけられなかったのですが、どんな文法でも、発音でも彼らはすごく理解しようとしてくれたし、分からないことがあったとき日本語も使って伝えようとしてくれました。それがすごく嬉しかったし、そのおかげで、私も積極的に会話することができました。伝えようとすることが大切だと何度も感じました。また、この研修全体を通して、タイという国を知り、固定概念や先入観が無くなって、ありのままの状態を知るだけでなく、日本や鹿児島との文化や生活環境などの違いについて考えたり、見直すきっかけの 1 つとなりました。

〔研修後の抱負〕

10 日間の研修を通して、講義、研究室訪問、会社訪問、PBL などで得た専門知識をしっかりと自分のものにするために、講義などに今まで以上に身を入れて、そのベースとなる部分を固めるとともに、興味をもったところをさらに知識を深めたいと思います。また、研修を終えて、今まで以上に海外に興味をもちました。そのため日々の積み重ねを大切にして、英語力を鍛えていく必要があると感じました。実際に、自分で行って見て感じることの素晴らしさを発見できたので、今後さらに様々な国に行って、異文化理解を広げたいです。